平和の子 抱きしめ

ウクライナへ 望郷

3月11日、ウクライナ中部・ジトーミルの病院で、2604グラムの女の子が産声を上げた。間もなく空襲警報が鳴り、看護師に抱きかかえられ、慌ただしく地下に避難した。戦禍の中、この世に生まれ落ちた娘に、両親は、平和と栄光を意味する「ミロスラバ」と名付けた。女児は今、避難先の西隣の国・モルドバで、愛情を受けながらすくすくと育っている。

ロシアによるウクライナ侵攻が始まった2月24日。ナタリア・ポニカルチュックさん(32)は長男ボーク(4)と自閉症キーウの西約50キロにあるコロリブカで暮らしていた。夫のイオンさん(35)は西に隣接するベラルーシの自宅を離れ、キーウに滞在していた。

近隣の村では爆撃があった。「田舎だからなる？」と不安に襲われた。イオンさんとは連絡がつかなかったが、その間、とにかく無事を祈るしかなかった。

出産を予定していた近くの村の病院は閉鎖した。大砲の音が聞こえる。戦況から数日後には自宅から西に約80キロ離れたジトーミルにある病院に入院した。長男、長女はナタリアさんの妹が面倒を見ることになった。出産は帝王切開だった。元気な泣き声を聞き、ナタリアさんは喜びをかみしめた。

夫とはテレビ通話で連絡を取り合った。すぐに「ミロスラバと名付けよう」と決めた。イオンさんは「侵攻前は別の名前を考えていた。後から聞いたら、親族もミロスラバがいいと思っていたようだ」と笑う。

イオンさんはモルドバ国籍だったため、ウクライナにあるモルドバ大使館相談に乗って3月23日、一家5人でモルドバに脱出した。

モルドバでは北部にあるオリシュカニという村で、イオンさんの母とその再婚相手が住む家に避難生活を送る。元々は4人分の寝室だった10畳ほどの部屋に、計7人で寝ている。ミロスラバちゃんはベッドをたくさん敷き、よく眠り、そしてあまり泣かないという。その赤ん坊を囲むように、一つのベッドに5人が一緒に休む。ウクライナの自宅と比べると窮屈な暮らしだが、「静かな環境で安心して眠れる。幸せ」とイオンさんは言う。

イオンさんは男の運転免許取得を目指す傍ら、職探しに励む。長男ブニさんは地元の学校に通い始めた。「友達とはロシア語で話されて、授業はルーマニア語だから難しい」と顔をしかめる。

ナタリアさんは慣れない暮らしに安らぎを感じつつも「早くウクライナに戻って父に成長した姿を見せたい」と望んでいる。【宮川佐知子】

ウクライナとモルドバ国境のユニセフなどの国際機関が用意した支援施設の前で、傘をさすベルソンから避難してきた男の子＝バランカで6月17日

次女ミロスラバちゃんの衣類など。大きなウクライナの支援団体による寄付という。母ナタリアさんは「本当にありがたい」と話した＝オリシュカニで6月11日

使われていない学校を利用した施設の寒地で「野鳥」のまねをする避難民用の男の子＝カサネシュティで7月6日

海外難民救援金募集

毎日新聞社と毎日新聞東京社会事業団は、紛争や災害、貧困などで苦しむ世界の人たちを支援する救援金を募集します。郵便振替か現金書留でお寄せください。物品はお受けできません。紙面掲載で「匿名希望」の方はその旨を明記してください。〒100―8051(住所不要)毎日新聞東京社会事業団「海外難民救援金」係(郵便振替00120・0・76498)

離散 モルドバ報告

戦禍の果て 命の光

ロシアの軍事侵攻が始まった2022年2月以降、ウクライナに住む多くの人々が住む場所を追われた。西隣モルドバには7月下旬までに約54万人が逃げ込み、今も約8万人が避難生活を送る。「空襲警報の聞こえない、少しでも安全な場所に行きたかった」。幼い子どもを連れた家族が多く、中には混乱下のウクライナで出産した人もいる。

慣れない環境で力を合わせ、小さな命を必死で守る日々。「子どもには平和が戻ったウクライナでのびのびと育ってほしい」と故郷への思いを募らせる。

4日、ヘルソンから逃げてきたイリーナ・ヒックさん(左端)は月10日、国内が騒がしいなかでナターシャさん(左から2人目)らを出産。ドイツに向かう予定だが、国境バスに乗るため、モルドバに戻ればアルキジアで6月2日

避難の旅 強い心を

「女の子と。5月20日の正午前、ウクライナ南部のオデッサにある病院に電話が鳴った。3340グラムの元気な赤ちゃん。母親のイリーナ・ヒックさん(33)は、小さな手を口にあてる姿をながめつめると、ようやくほっとした。

思えば苦難の連続だった。自宅のあるヘルソン州は、2月下旬の侵攻開始直後から、ロシア軍の攻撃にさらされ続けた。自宅は無事だったが、あちこちでミサイルが着弾していた。臨月のイリーナさんは夫と2人の息子たち(9歳と1歳)の一家4人で脱出を決意した。

4月14日、ミコライウを目指して西の方に移動を始めた。途中、別の家族から幼稚園の教室を間借りして一夜を過ごしたが、ここでも爆音におびえた。16日にはヘルソンから西に約140キロ離れたオデッサに到着し、知人の親類宅に身を寄せた。それからは、何日たっても砲撃はなかった。「街は安全で、何もかも快適に思えた」。5月中旬から入院した病院は清潔で、医師らがケアをしっかりしてくれた。穏やかな時間を取り戻した、無事に出産したイリーナさんによると、ヘルソン州では空襲警報が鳴りやまず、どこからともなくミサイルが着弾するとの噂が多かったという。それでも「出産日が近づくにつれ、息子たちの笑顔が増えた」。初めから妹がほしい―とおだてまくしたからだ。

イリーナさんは、ゆっくりと幸福感に浸る暇はなかった。生まれたばかりの赤ちゃんの名は、可愛らしい響きの「ポリーナ」にすることに決めていた。

しかし、ゆっくりと幸福感に浸る暇はなかった。生まれたばかりの赤ちゃんの名は、可愛らしい響きの「ポリーナ」にすることに決めていた。

「こんなに可愛いんだよ！」。6月7日、経由地のモルドバで、長男のエゴール君(11)は両手に抱えたポリーナちゃんを配達人に差し出し、笑顔を見せた。イリーナさんもレンズに向かって、ほほをゆるめた。そうして旬から入院した病院は清潔で、医師らがケアをしっかりしてくれた。穏やかな時間を取り戻した。無事に出産したイリーナさんによると、ヘルソン州では空襲警報が鳴りやまず、どこからともなくミサイルが着弾するとの噂が多かったという。それでも「出産日が近づくにつれ、息子たちの笑顔が増えた」。初めから妹がほしい―とおだてまくしたからだ。

約1週間後、一家は最終的地であるドイツ北部のプランウシュパイクに到着した。イリーナさんによると、6月10日からドイツ政府が用意したアパートで暮らしている。ウクライナの同じ出身地の人たちが、新たに出会った友人たちが子育てを手伝ってくれるという。

ポリーナちゃんには、何が起こっても動じない強い心を持ってほしい、と願う。「こんなに大変な困難を乗り越えたんだから、大丈夫よ」。小さな娘をなでる母に、そう思う。【田中敦子】

宿泊所生活が長引く中、プレイルームで息子のミハイル君(左)を抱いて笑顔を見せるエレーナ・チェファンさん＝キシナウで5月25日

❶避難民の滞在施設でペットとともに暮らすベラ・ナミストークさん(左端)、娘の二コールさん(左から2人目)ら＝キシナウで5月31日
❷ウクライナとモルドバ国境で、テントやコンテナが並ぶ一時滞在施設で支援団体の関係者に手を引かれる子どもたち。バランカには国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)などが常駐し、相談や食事の提供、各地に向かうバスの運行などの支援をしている＝バランカで6月17日

女性が安心できる環境整備 国連人口基金

インタビューに答える国連人口基金モルドバ事務所のニギーナ・アパサダ代表＝キシナウで6月9日

ウクライナ政府は18～60歳の男性の国外退出を原則禁止していることから、国外に逃れてきたのの多くは女性や子どもだ。国連人口基金(UNFPA)は、女性らが安心して過ごせる環境の整備に取り組んでいる。

UNFPAはモルドバにある難民センターなどを拠点に、妊婦や産後間もない女性に対する相談窓口を設置し、地元住民と協力を強化する。妊娠や出産、性暴力などを巡る相談に応じ、必要な支援につなげる狙いがあるが、UNFPAモルドバ事務所のニギーナ・アパサダ代表は「相談はどのような内容でもかまわない。不安を抱える人が安心して話せる場所をつくることが大切だ」と話す。

UNFPAはモルドバにいる難民のうち、約1500人が妊娠していると推計し、産婦人科のある7カ所の病院を対象にベッドを増やし、専門化した助産の支援や手術室の環境整備を進める。アパサダ代表は「モルドバの場合、新しい施設を建てる必要はないが、改善が必要な病院はたくさんある。モルドバに住む人にとっても社会に立つ支援となればいい」と期待を込める。【宮川佐知子】